

森  
鷗  
外

百  
物  
語





百  
物  
語



何か事情があつて、川開きが暑中を過ぎた後に延びた年の当日であつたかと思う。余程年も立っているので、記憶が稍<sup>やや</sup>おぼろげになつてはいるが又<sup>かえつ</sup>却てそれが為<sup>た</sup>めに、或る廉々<sup>かどかど</sup>がアクサンチュエエせられて、翳<sup>かす</sup>んだ、濁つた、しかも強い色に彩<sup>いろど</sup>られて、古びた想像のしまつてある、僕の脳髓の物置の隅<sup>すみ</sup>に転<sup>ころ</sup>がっている。

勿論<sup>もちろん</sup>生れて始ての事であつたが、これから後も先<sup>ま</sup>ずそんな事は無さそうだから、生涯に只一度の出来事に出く

わしたのだと云って好かろう。それは僕が百物語の催しに行つた事である。

小説に説明をしてはならないのだそうだが、自惚うぬぼれは誰にもあるもので、この話でも万一ヨオロッパのどの国かの語ことばに翻訳せられて、世界の文学の仲間入をするような事があつた時、余所よその読者に分からないだらうかと、作者は途方もない考を出して、行きなり説明を以てもつこの小説を書きはじめる。百物語とは多勢の人が集まって、蠟燭ろうそくを百本立てて置いて、一人が一つずつ化物ばけものの話をして、一本ずつ蠟燭を消して行くのだそうだ。そうすると

百本目の蠟燭が消された時、真の化物が出ると云うことである。事によつたら例のフアキイルと云う奴やつがアルラア・アルラアを唱えて、頭を掉ふっているうちに、覲面てきめんに神を見るように、神経に刺戟しげきを加えて行つて、一時幻視幻聴を起すに至るのではあるまいか。

僕をこの催しに誘い出したのは、写真を道楽みぎれいにしていしとみる薀君と云う人であつた。いつも身綺麗みぎれいにしていて、衣類や持物に、その時々おの流行を趁おっている。或時僕が脚本の試みをしているのを見てこんな事を言つた。「どうもあなたのお書きになるものは少し勝手が違つていま

す。ちよいちよい芝居を御覧になったら好いでしよう」  
これは親切に言ってくれたのであるが、こっちが却って  
その勝手を破壊しようと思っっているのだとは、全く気が  
附いていなかったらしい。僕の試みは試みで終ってしま  
って、何等の成功をも見なかったが、後継者は段々勝手  
の違った物を出し出しして、芝居の面目が今ではだいぶ  
改まりそうになって来ている。つまり振れた、時代を超  
絶したような考は持つてもいず、解せようともしなかつ  
たのが、葩君の特色であつたらしい。さ程深くもなかつ  
た交まじわりが絶えてから、もう久しくなっているが、僕はあ



の人の飽くまで穩健な、目前に提供せられる受用を、程  
 好く享受していると云う風の生活を、今でも羨ましく  
 思っている。蔀君は下町の若旦那わかだんなの中で、最も聡明そうめいな一  
 人であつたと云つて好かろう。

この蔀君が僕の内へ来たのは、川開きの前日の午過ぎひるす  
 であつた。あすの川開きに、両国を跡あとに見て、川上へ上  
 つて、寺島で百物語の催しをしようとするのだが、行つ  
 て見ぬかと云う。主人は誰だ。案内もないに、行つても  
 好いのかと、僕は問うた。「なに。例の飾磨屋しかまやさんが催  
 すのです。だいぶ大勢の積りだし、不参の人もありそう

だから、飛入をしても構わないのですが、それでは徳義  
上行かれぬなんぞと、あなたの事だから云うかも知れな  
い。しかし二三日前に逢った時、あなたにはわたくしか  
ら話をして見て、来られるようなら、お連申すかも知れ  
ないと、勝兵衛しょうべえさんにことわってあります。わたくし  
が一しよに行くといいが、外ほかへ廻まわって行かなくてはなら  
ないから、一足先きへ御免を蒙こうむります」との事であつ  
た。

時刻と集合の場所とを聞いて置いた僕は、丁度外に用  
事もないので、まあ、どんな事をするか行って見ようと

云う位の好奇心を出して、約束の三時半頃に、柳橋の船宿へ行つて見た。天気はまだ少し蒸暑いが、余り強くない南風が吹いていて、しの凌ぎ好かつた。船宿は今は取り払われた河岸で、か丁度かめせい亀清の向側むこうがわになつていた。多分増田屋であつたかと思う。

こう云う日に目貫めぬきの位置にある船宿一軒を借切りにしたものと見えて、しかもその家は近所の雑沓ざつとうよりも雑沓している。階上階下とも、どの部屋にも客が一ぱい詰め掛けている。僕は人の案内するままに二階へ升のぼつて、一間ひとまを見渡したが、どれもどれも知らぬ顔の男ばかりの中に、

鬚ひげの白い依田よだ学海さんが、紺こん紺がすりの銘めい撰せんの着流しに、薄羽織を引っ掛けて据わっていた。依田さんの前には、大層身綺麗きれいにしている、少し太った青年が恭しげに据わって、話をしてている。僕は依田さんに挨拶をして、少し隔たった所に割り込んだ。簾すだれ越ごしに川風が吹き込んで、人の込み合しぼらっている割に暑くはなかった。

僕は暫しばらく依田さんと青年との対話を聞いているうちに、その青年が壮士俳優だと云うことを知った。俳優は依田さんの意を迎えて、「なんでもこれからの俳優は書見をいたさなくてはなりません」などと云っている。そ

してそう云っている態度と、読書と云うものが、この上もない不調和に思われるので、僕はおせっかいながら、傍そばで聞いていて微笑せざることを得なかった。同時に僕には書見と云う詞ことばが、極めて滑稽こっけいな記憶を呼び醒さました。それは昔どこやらで旧俳優のした世話物を見た中に、色若衆のような役をしている役者が、「どれ、書見をいたそうか」と云って、見台を引き寄せた事であった。なんでもそこへなまめいた娘が薄茶か何か持って出るようになっていた。その若衆のしらじらしい、どうしても本の読めそうにない態度が、書見と云う和製の漢語にひどく

好く適合していたが、この滑稽を舞台の外で、今繰り返して見せられたように、僕は思ったのである。

そのうち僕はこう云う事に気が附いた。しらじらしいのは依田さんに対する壮士俳優の話ばかりではない。この二階に集まった大勢の人は、一体に詞少なで、それが見たまたま何か言おうと、皆しらじらしい。同一の人が同一の場所へ請待しょうだいした客でありながら、乗合馬車や渡船の中で落ち合った人と同じで、一人一人の間になんの共通点もない。ここかしこで互に何か言うのは、時候の挨拶位に過ぎない。ぜんまいの戻った時計を振ると、セコン

ドがちよつと動き出して、すぐに又止まるように、こんな会話は長くは持たない。たちま忽ち元の沈黙に返ってしま  
うのである。

僕は依田さんに何か言おうかと思つたが、どうもやはりしらじらしい事しきや思い附かないので、言い出さず  
にしまった。そしてそこ等の人の顔を眺ながめていた。どの  
客もてんでに勝手な事を考えているらしい。百物語と云  
うものに呼ばれては来たものの、その百物語は過ぎ去つ  
た世の遺物である。遺物だと云つても、物はもう亡くな  
つて、只空むなしき名が残っているに過ぎない。客観かっかん的には

元から幽霊は幽霊であつたのだが、昔それに無い内容を嘘ふき入れて、有りそうにした主観までが、今は消え失せてしまっている。怪談だの百物語だのと云うものの全体が、イブセンの所謂いわゆる幽霊になつてしまつている。それだから人を引き附ける力がない。客がてんでに勝手な事を考えるのを妨げる力がない。

人も我もぼんやりしている処へ、世話人らしい男が来て、舟へ案内した。この船宿の棧橋さんばしばかりに屋根船が五六艘そう着ついている。それへ階上階下から人が出て乗り込む。中には友禅ゆうぜんの赤い袖がちら附いて、「一しよに乗りたい



わよ、こっちへお出よいで」と友を誘うお酌の甲走かんばしった声がする。しかし客は大抵男ばかりで、女は余り交っていないらしい。皆乗り込んでしまふまで、僕は主人の飾磨屋がどこにいるか知らずにしまった。又葩君にも逢わなかつた。

船宿の二階は、戸は開け放してあつても、一ぱいに押し込んだ客の人いきれがしていたが、舟を漕こぎ出すと、すぐ極ごく好い心持に涼しくなつた。まだ花火を見る舟は出ないので、川面かわづらは存外がっこう込み合っていない。僕の乗った舟を漕いでいる四十恰好の船頭は、手垢てあかによごれた根附ねつけの

牙彫げぼりのような顔に、極めて真面目まじめな表情を見せて、器械的に手足を動かして解ろを操あやつっている。飾磨屋の事だから、定めて祝儀もはずむのだろうに、嬉うれしそうには見えない。「勝手な馬鹿をするが好い。己おれは舟さえ漕いでいれば済むのだ」とでも云いたそうである。

僕は薄縁うすべりの上に胡坐あぐらを掻かいて、麦藁帽子むぎわらを脱いで、ハンケチを出して額の汗を拭ふきながら、舟の中の人の顔を見渡した。船宿を出て舟に乗るまでに、外の座敷の客が交ったと見えて、さつき見なかった顔がだいぶある。依田さんは別の舟に乗ったと見えて、とうとう知った顔が

一人もなくなつた。そしてその知らない、幾つかの顔が、やはり二階で見た時のように、ぼんやりして、てんでに勝手な事を考えているらしい。

舟には酒肴しゅこうが出してあつたが、一々どの舟へも、主人側のものを配ると云うような、細かい計画はしてなかつたのか、世話せわを焼いて杯さかずきを侑すすめるものもない。こう云う時の習ならいとして、最初は一同遠慮をして酒肴に手を出さずに、只睨にらみ合つていた。そのうち結城紬ゆうきつむぎの单物ひとえものに、縞紹しまろの羽織を着た、五十恰好の赤ら顔の男が、「どうです、皆さん、切角出してあるものですから」と云つて、

杯を手にとると、方方から手が出て、杯を取る。割箸わりばしを取る。盛んに飲食が始まった。しかし話はやはり時候の挨拶位のものである。「どうです。こう天気続きでは、米が出来ますでしょうか」「さようさ。又米が安過ぎ、て不景気と云うような事になるでしょう」「そいつあ渉かないませんぜ。鶴亀つるかめ鶴亀」こんな対話である。

僕のいる所からは、すぐ前を漕いで行く舟の艦ともの方が見える。そこにはお酌が二人乗っている。傍そばに頭を五分刈にして、織地のままの繭紬けんちゆうの陰紋かげもん附に袴はかまを穿はいて、羽織を着ないでいる、能役者のような男がいて、何やら

言ってお酌を擲揄うらしく、きやつきやと云わせている。  
 舟は西河岸の方に倚って上って行くので、厩橋手前  
 までは、お蔵の水門の外を通る度に、さして来る潮に淀  
 む水の面に、藁やら、鉋屑やら、傘の骨やら、お丸の  
 こわれたのやらが浮いていて、その間に何事にも頓着  
 せぬと云う風をして、鷗が波に揺られていた。諏訪町  
 河岸のあたりから、舟が少し中流に出た。吾妻橋の上に  
 は、人がだいぶ立ち止まって川を見卸していたが、その  
 中に書生がいて、丁度僕の乗っている舟の通る時、大声  
 に「馬鹿」とどなった。

舟の着いたのは、木母寺辺であつたかと思う。生憎風がぱったり歇んでいて、岸に生えている葦の葉が少しも動かない。向河岸の方を見ると、水蒸気に飽いた、灰色の空気が、橋場の人家の輪廓をぼかしていた。土手下から水際まで、狭い一本道の附いている処へ、かわるがわる舟を寄せて、先ず履物を陸へ揚げた。どの舟もどの舟も、載せられるだけ大勢の人を載せて来たので、お酌の小さい雪踏などは見附かっても、客の多数の穿いて来た、世間並の駒下駄は、鑑定が容易に附かない。真面目な人が跣足で下りて、あれかこれかと捜しているうちに、無

頓着な人は好い加減なのを穿いて行く。中には横着おうちやくで新しそうなものを選んで穿く人もある。僕はしかたがないからなるべく跡まで待っていて、残った下駄を穿いたところが、齒の斜ななめに踏み耗へらされた、随分歩きにくい下駄であった。後に聞けば、飾磨屋が履物の間違った話を聞いて、客一同に新しい駒下駄を贈ったが、僕なんぞには不躩ぶしつけだと云う遠慮から、この贈物をしなかつたそうである。

定めて最初に着いた舟に世話人がいて案内をしたのだろう。一艘の舟が附くと、その一艘の人が、下駄を捜し

たりなんかして、まだ行ってしまわないうちに、もう次の舟の人が上陸する。そして狭い道を土手へ上がって、土手の内の田圃たんぼを、寺島村の誰やらの別荘をさして行く。その客の群は切れたり続いたりはするが、切れた時でも前の人の後影を後の人が見失うようなことはない。僕も歯の歪ゆがんだ下駄を引き摩ずりながら、田の畔くろや生垣いけがきの間の道を歩いて、とうとう目的地に到着した。

ここまで来る道で、幾らも見つたような、小さい屋敷である。高い生垣を繞めぐらして、冠木門かぶきもんが立ててある。それを這はい入ると、向うに煤すすけたような古家の玄関が見えてい



るが、そこまで行く間が、左右を外そとがこい囲よりずっと低いかなめ垣で為切しきった道になっていて、長方形の花崗石みかげいしが飛び飛びに敷いてある。僕に背中を見せて歩いていたら、偶然の先導者はもう無事に玄関近くまで行っている頃、門と、玄関との中程で、左側のかなめ垣がとぎれている間から、お酌が二人手を引き合って、「こわかったわねえ」と、首を縮めて咄はなき合あいながら出て来た。僕は「何があるのだい」と云ったが、二人は同時に僕の顔を不遠慮に見て、なんだ、知りもしない奴の癖にとでも云いたそうなの、極く愛相のない表情をして、玄関の方へ行つて

しまった。僕はふいと馬鹿げた事を考えた。昔の名君は  
一顰いっぴん一笑を惜んだそうだが、こいつ等はもう只で笑わな  
いだけの修行をしているなと思つたのである。そんな事  
を考えながら、格別今女の子のこわがった物の正体を確  
めたいと云う熱心もなく、垣のときれた所から、ちよつ  
と横に這入つて見た。

そこには少し引つ込んだ所に、不断は植木鉢うえきばちや箒ほうきで  
も入れてありそうな、小さい物置があつた。もう物蔭は  
少し薄暗くなつていて、物置の奥がはつきり見えないの  
を、覗のぞき込むようにして見ると、髪を長く垂れた、等身

大の幽霊の首に白い着物を着せたのが、萱かやか何かを束ねて立てた上に覗かせてあつた。その頃まで寄席よせに出る怪談師が、明りを消してから、客の間を持ち廻つて見せることになつていた、出来合の幽霊である。百物語のアヴァン・グウはこんな物かと、稍馬鹿ややにせられたような気がして、僕は引き返した。

玄関に上がる時に見ると、上がつてすぐ突き当る三畳には、男が一人立って何か忙がしそうに規き合つていた。「どうしやがったのだなあ」「それだからおいらが蠟燭は舟で来る人なんぞに持せて来ては行けないと云つたの

だ。差当り燭台しよくだいに立ててあるのしきやないのだから」と云うような事を言っている。楽屋の方の世話も焼いている人達であろう。二人は僕の立っているのには構わずに、奥に這入ってしまふ。入り替って、一人の男が覗いて見て、黙って又引っ込んでしまふ。

僕はどうしようかと思つて、暫く立ち竦すくんでいたが、右の方の唐紙からかみが明いている、その先きに人声こゑがするので、その方へ行つて見た。そこは十四畳ばかりの座敷で、南側は古風に刈り込んだ松の木があつたり、雪見燈籠どつろうがあつたり、泉水があつたりする庭を見晴している。この座

敷にもう二十人以上の客が詰め掛けている。やはり船宿や舟の中と同じ様に、余り話はずんでいない。どの顔を見ても、物を期待しているとか、好奇心を持っているとか云うような、緊張した表情をしているものはない。

丁度僕が這入った時、入口に近い所にいる、髯ひげの長い、紗しやの道行みちゆき触ぶりを着た中ちゆう爺うじいさんが、「ひどい蚊かですなあ」と云うと、隣の若い男が、「なに藪蚊やぶかですから、明りを附ける頃にはいなくなってしまう」と云うその声が耳馴れているので、顔を見れば、蔀しとみ君であつた。蔀君も同時に僕の顔を見附けた。

「やあ。お出いでなさいましたか。まだ飾磨屋さんを御存じないのでしたね。一寸御紹介をしましちよつとよう」

こう云って薮君は先きに立って、「御免なさい、御免なさい」を繰り返しながら、平手で人を分けるようにして、入口と反対の側の、格子窓こうしのある方へ行く。僕は黙って跡に附いて行った。

薮君のさして行く格子窓の下の所には、外の客と様子の変わった男がいる。しかも随分込み合っている座敷なのに、その人の周囲は空席になっているので、僕は入口に立っていた時、もうそれが目に附いたのであった。年は

三十位でもあろうか。色の蒼い<sup>あお</sup>、長い顔で、髪は刈つてからだ**いぶ日**が立っているらしい。地味な縞<sup>しま</sup>の、鈍い、薄青い色の勝った何やらの単物に袴を着けて、少し前屈<sup>まえかが</sup>みになって据わっている。徹夜をした人の目のように、軽い充血の痕<sup>あと</sup>の**見えて**いる目は、余り周囲の物を見ようともせず**に**、大抵直前<sup>すぐまえ</sup>の方向を凝視している。この男の傍<sup>そば</sup>には、少し背後<sup>うしろ</sup>へ下がって、一人の女が付き添っている。これも支度が極<sup>ごく</sup>地味な好みで、その頃流行<sup>はや</sup>った紋織お召の単物も、帯も、帯止も、ひたすら目立たないようにと心掛けて**いる**らしく、薄い鼠が根調をなして**いて**、二十<sup>はたち</sup>

になるかならぬ女の装飾としては、殆どほん異様に思われ  
 る程である。中肉中背で、可哀らしい円顔をしている。  
 銀杏返いちようがえしに結つて、体中で外にない赤い色をしている六  
 分珠ぶだまの金釵きんかんを挿さした、たつぷりある髪かみの、鬢びんのおくれ毛  
 が、俯向うつむいている片頬かたほに掛かかっている。好い女ではある  
 が、どここと云つて鋭い、際立さつた線もなく、凄すごいような  
 処ところもない。僕は一寸見た時から、この男の傍そばにこの女の  
 いるのを、只何となく病人に看護婦が附ついているように  
 感じたのである。

薮君が僕をこの男の前に連れて行って、僕の名を言う



と、この男は僕を一寸見て、黙って丁寧に辞儀をしただけであった。蔀君はそこらにいた誰やらと話をし出したので、僕はひとり縁側の方へ出て、いつの間にか薄い雲の掛かった、暮方の空を見ながら、今見た飾磨屋と云う人の事を考えた。

今紀文いまきぶんだと評判せられて、あらゆる豪遊をすることが、新聞の三面に出るようになってからもうだいぶ久しくなる。きょうの百物語の催しなんぞでからが、いかにも思とんじやくい切って奇抜な、時代の風尚にも、社会の状態にも頓着とんじやくしない、大胆な所作しよきだと云わなくてはなるまい。

もとより  
原来百物語に人を呼んで、どんな事をするだろうか

云う、僕の好奇心には、そう云う事をする男は、どんな男だろうかと云う好奇心も多少手伝っていたのである。

僕は慥たしかに空想で飾磨屋と云う男を画き出していたには違いないが、そんならどんな風をしている男だと想像していたかと云うと、僕もそれをはつきりとは言うことが出来ない。しかし不遠慮に言えば、百物語の催主が氣違染じみた人物であつたなら、どつちかと云えば、必ず躁狂そうきやうに近い間違方だろうとだけは思っていた。今実際に見たような沈鬱ちんうつな人物であろうとは、決して思っていなかつ

た。この時よりずっと後になって、僕はゴリキイのフオマ・ゴルジエフを読んだが、若<sup>も</sup>しきようあのフオマのように、飾磨屋が客を攫<sup>つか</sup>まえて、隅田川へ投げ込んだって、僕は今見たその風采<sup>ふうさい</sup>ほど意外には思わなかったかも知れない。

飾磨屋は一体どう云う男だろう。錯雑した家族的關係やなんか、新聞に出たこともあり、友達の噂<sup>うわさばなし</sup>話で耳に入ったこともあったが、僕はそんな事に興味を感じないので、格別心に留めずにした。しかしこの人が何かの原因から煩悶<sup>はんもん</sup>した人、若くは今もしている人だと云

うことは疑がないらしい。大抵の人は煩悶して焼けになつて、豪遊をするとなると、きつと強烈な官能的受用を求めて、それに依つて意識をぼかしていようとすものである。そう云う人は躁狂に近い態度にならなくてはならない。飾磨屋はどうもそれとは違ふようだ。一体あの沈鬱なような態度は何に根ざしているだろう。あの目の血走っているのも、事によつたら酒と色とに夜を更ふかしたためではなくて、深い物思に夜をおだやか穩かに眠ることの出し来なかつたためではあるまいか。強しいて推察して見れば、この百物語の催しなんぞも、主人は馬鹿げた事だと云う

ことを飽くまで知り抜いていて、そこへ寄って来る客の、  
或<sup>あるい</sup>は酒食<sup>むさぼ</sup>を貪<sup>むさぼ</sup>る念に駆られて来たり、或はまた迷信の  
霧に理性を鎖<sup>とくわ</sup>されていて、こわい物見たさの<sup>おさな</sup>穉<sup>おさな</sup>い好奇  
心に動かされて来たりするのを、あの血糸の通っている、  
マリシヨオな、デモニツクなようにも見れば見られる目  
で、冷<sup>ひやや</sup>かに見ているのではあるまいか。こんな想像が  
一時浮んで消えた跡でも、僕は考えれば考えるほど、飾  
磨屋と云う男が面白い研究の対象になるように感じた。  
僕はこう云う風に、飾磨屋と云う男の事を考えると同  
時に、どうもこの男に附いている女の事を考えずにはい

られなかった。

飾磨屋の馴染なじみの馴染なじみは太郎だと云うことは、もう全国に知れ渡っている。しかしそれよりも深く人心に銘記せられて  
いるのは、太郎が東京で最も美しい芸者だと云う事であった。尾崎紅葉君が頬杖ほおづえを衝ついた写真を書した時、あれは太郎の真似をしたのだと、みんなが云ったほど、太郎の写真は世間に広まっていたのである。その紅葉君で思  
い出したが、僕はこの芸者をきょう始て見たのではない。  
この時より二年程前かと思う。湖月に宴会があつて行  
つて見ると、紅葉君はじめ、硯友社けんゆうしゃの人達が、客の中で

最多数を占めていた。床の間に梅と水仙の生けてある頃の寒い夜が、もうだいぶ更けていて、紅葉君は火鉢ひばちの傍わきへ、肱枕ひじまくらをして寐ねてしまった。尤もつとも紅葉君は折々たぬき狸ねいり寐入ねいりをする人であったから、本当に寐ねていたかどうか知らない。僕はふいと床の間の方を見ると、一座は大抵縞物くろはぶたえを着ているのに、黒羽二重くろはぶたえの紋付と云う異様な出立いでたちをした長田秋濤君おさだしゅうとうが床柱に倚り掛かって、下太りの血色の好い顔をして、自分の前に据わっている若い芸者と話をしていた。その芸者は少し体を屈めて据わって、沈んだ調子の静かな声で、只の娘らしい話振はなぶりをしていたが、

島田に結った髪の毛や、頬のふっくりした顔が、いかにも可哀らしいので、僕が傍の人に名を聞いて見たら、「君まだ太郎を知らないのですか」と、その人がさも驚いたような返事をした。

太郎が芸者らしくないと云う感じは、その時から僕にはあつたのだが、きよう見ればだいぶ変っている。それでもやはり芸者らしくはない。先きの無邪気な、娘らしい処はもうなくなつて、その時つつましい中うちにも始終見せていた笑顔えがおが、今はめつたに見られそうにもなくなつている。一体あんなに飽くまで身綺麗にして、巧者に着



物を着こなしているのに、なぜ芸者らしく見えないのだろうか。そんならあの姿が意気な奥様らしいと云おうか。それも適當ではない。どうも僕にはやはりさつき這入った時の第一の印象が付き纏まとっていてならない。それはふと見て病人と看護婦のようだと思った、あの刹那せつなの印象である。

僕がぼんやりして縁側に立っている間に、背後うしろの座敷には燭台が運ばれた。まだ電燈のない時代で、瓦斯ガスも寺島村には引いてなかったが、わざわざランプを廃やめて蠟燭にしたのは、今宵こよいの特別な趣向であったのだらう。

燭台が並んだと思うと、跡から大きな盥たらいが運ばれた。中には鮓すしが盛ってある。道行触みちゆきぶりのおじさんが、「いや、これは御趣向」と云うと、傍にいた若い男が「湯灌ゆかんの盥と云う心持ですな」と注釈を加えた。すぐに跡から小形の手桶ておけに柄杓ひしゃくを投げ入れたのを持って出た。手桶からは湯気が立っている。先さっきの若い男が「や、闕伽桶あかおけ」と叫んだ。所謂いわゆる闕伽桶の中には、番茶が麻ふくろの囊ふくろに入れて漬けてあったのである。

この時玄関で見掛けた、世話人らしい男の一人が、座敷の真ん中に据わって「一寸皆様に申し上げます」と冒

頭を置いて、口上めいた挨拶をした。段々準備が手おくれになつて済まないが、並なみの飯の方を好む人は、もう折詰の支度もしてあるから、別間の方へ来て貰いたいと云う事であつた。一同鮓を食つて茶を飲んだ。僕には葩君が半紙に取り分けて、持つて来てくれたので、僕は敷居の上にしやがんで食つた。「お茶も今上げます。盥も手桶も皆新しいのです」と葩君は言いわけをするように云つて置いて、茶を取りに立つた。しかしそんな言いわけらしい事を聞かなくても、僕は飲食物の入物の形を気にする程、細かく尖とがつた神経を持つてはいないのであつた。

僕が主人夫婦、いや、夫婦にはまだなっていないなかつた、いやいや、やはり夫婦と云いたい、主人夫婦から目を離していたのは、座敷に背を向けて、暮れて行く庭の方を見ながら、物を考えていた間だけであつた。座敷を見ている間は、僕はどうしても二人から目を離すことが出来なかつた。客が皆飲食をしても、二人は動かずにじっとしている。袴の襷ひだを崩くずさずに、前屈みになつて据わつたまま、主人は誰たれに話をするでもなく、正面を向いて目を据えている。太郎は傍そばに引き添つて、退屈らしい顔もせず、何があつても笑いもせず、おりおり主人の顔を横

から覗いて、機嫌を窺うようにしている。

僕は障子のはずしてある柱に背を倚せ掛けて、敷居の上にしやがんで、海苔卷のりまきの鮎あしを頬張りながら、外を見ている振をして、実は絶えず飾磨屋の様子を見ている。一体僕は稟賦ひんぷと習慣との種々な関係から、どこにも出て来ても傍観者になり勝である。西洋にいた時、一頃大ひところそう心易く付き合った爺いさんの学者があつた。その人は不治の病を持っていてるので、生涯無妻で暮した人である。その位だから舞踏なんぞをしたことはない。或る時舞踏の話が出て、傍そばの一人が僕に舞踏の社交上必要なわけを説明し

て、是非稽古をしろと云うと、今一人が舞踏を未開時代の遺俗だとしての観察から、可笑おかしいアネクドオト交りに舞踏の弊害を列ならべ立てて攻撃をした。その時爺いさんは黙って聞いてしまつて、さてこう云つた。「わたくしは御存じの体ですから、舞踏なんぞをしたことはありません。自分の出来ない舞踏を、人のしているのを見ます度に、なんだかそれをしている人が人間ではないような、神のような心持がして、只目を漣みはって視ているばかりでございますよ」と云つた。爺いさんのこう云う時、顔には微笑の淡い影が浮んでいたが、それが決して冷刻な

あざけり  
嘲あざけりの微笑ではなかった。僕は生れながらの傍観者と云うことに就いて、深く、深く考えて見た。僕には不治の病はない。僕は生れながらの傍観者である。子供に交って遊んだ初から大人になって社交上尊卑種々の集會に出て行くようになった後まで、どんなに感興うずまきの涌わき立った時も、僕はその渦うずまき卷まきに身を投じて、心しんから楽しんだことがない。僕は人生の活劇の舞台にいたことはあっても、役らしい役をしたことがない。高がスタチストなのである。さて舞台上上らない時は、魚うおが水に住むように、傍観者が傍観者の境さかいに安んじているのだから、僕はその時尤

もその所を得ているのである。そう云う心持になつていて、今飾磨屋と云う男を見ているうちに、僕はなんだか他郷で故人に逢うような心持がして来た。傍観者が傍観者を認めたとような心持がして来た。

僕は飾磨屋の前生涯を知らない。あの男が少壮にしてきよまん鉅万の富を譲り受けた時、どう云う志望を懐いだいていたか、どう云う活動を試みたか、それは僕に語る人がなかった。しかし彼が芸人つきあい附合を盛んにし出して、今紀文と云われとしつきるようになってから、もう余程の年月が立っている。察するに飾磨屋は僕のような、生れながらの傍観者ではな



かっただらう。それが今は慥かに傍観者になっている。しかしどうしてなったのだらうか。よもや西洋で僕の師友にしていた学者のような、オルガニツクな欠陥が出来たのではあるまい。そうして見れば飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創<sup>そう</sup>痕<sup>い</sup>を受けてそれが癒<sup>い</sup>えずにいるために、傍観者になったのではあるまいか。

若しそうだとすると、その飾磨屋がどうして今宵のよ<sup>う</sup>な催<sup>ん</sup>し<sup>ぬ</sup>をするのだらう。世間にはもう飾磨屋の破産を云々<sup>うんぬん</sup>するものもある。豪遊の名を一時に擅<sup>ほしいまま</sup>にしてから、もうだいぶ久しくなるのだから、内証は或はそうな

っているかも知れない。それでいて、こんな催しをするのは、彼が忽ち富豪の主人になって、人を凌しのぎ世おごに傲おごつた前生活の惰力ではあるまいか。その惰力に任せて、彼は依然こんな事をして、丁度作家が同時に批評家の眼で自分の作品を見る様に、過ぎ去った栄華のなごりを、現在の傍観者の態度で見ているのではあるまいか。

僕の考は又一転して太郎の上に及んだ。あれは一体どんな女だろう。破産の噂うわさが、殆ど別な世界に栖せい息そくしていると云って好い僕なんぞの耳に這入る位であるから、れいり 伶俐らしいあの女がそれに気が附かずにいる筈はずはない。

なぜ死期しごの近い病人の体を蝨しらみが離れるように、あの女は離れないだろう。それに今の飾磨屋の性質はどうだ。傍観者ではないか。傍観者は女の好んで扱えらぶ相手ではない。なぜと云うに、生活だの生活の喜よろこびだのと云うものは、傍観者の傍では求められないからである。そんなら一体どうしたと云うのだろう。僕の頭には、又病人と看護婦と云う印象が浮んで来た。女の生涯に取って、報酬を予期しない看護婦になると云うこと、しかもその看護を自己の生活の唯一の内容としてしていると云うこと程、大いなる犠牲は又とあるまい。それも夫婦の義務の鎖つなに繫

がれていてする、イブセンの謂いう幽霊たに崇たられていてすると云うなら、別問題であろう。この場合にそれはない。又恋愛の欲望の鞭むちでむちうたれていてすると云うなら、それも別問題であろう。この場合に果してそれがあるろうか、少くも疑はを挾さむ余地がある。そうして見ると、財産でもなく、生活の喜でもなく、義務でもなく、恋愛でもないとして考えて、僕はあの女の捧げる犠牲のいよいよ大きくなるのに驚かすにはいられなかつたのである。

僕はこんな事を考えて、鮓しょうを食ってしまった跡に、生姜しょうがのへがしたのが残っている半紙を手持もつたまま、

ぼんやりしてやはり二人の方を見ていた。その時一人の世話人らしい男が、飾磨屋の傍へ来て何か規くと、これまで殆ど人形のように動かずにいた飾磨屋が、つと起たつて奥に這入った。太郎もその跡に引き添って這入った。

暫くすると蔀君が僕のいる所へ来て、縁側にしゃがんで云った。「今あっちの座敷で弁当を上がっていないすつた依田先生が、もう怪談はお預けにして置いて帰ると云われたので、飾磨屋さんは見送りに立ったのです。もう暑くはありませんから、これから障子を立てさせて、狭くても皆さんにここへ集まって貰って、怪談を始めさせ

るのだそうです」と云った。僕はさつき飾磨屋を始めて見たとき、あの沈鬱なような表情に気を付け、それからこの男の瞬またたきもせず、じつとして据わっているのを、稍久しく見て、始終なんだか人を馬鹿にしているのではないかというような感じを心の底に持っていた。この感じが鋭くなって、一刹那せつなあの目をデモニツクだとさえ思ったのである。そうであるのに、この感じが、今依田さんを送りに立ったと云うだけの事を、薮君の話に聞いて、なんとなく少し和げられた。僕は薮君には、只自分もそろそろ帰ろうかと思っていると云うことを告げた。僕は

最初に、百物語だと云って、どんな事をするだろうかと思つた好奇心も、催主の飾磨屋がどんな人物だろうかと思つた好奇心も、今は大抵満足させられてしまつて、この上雇われた話家の口から、古い怪談を聞こうと云う希望は少しも無くなつていたからである。蔀君は留めようともしなかつた。

改まつて主人に暇乞いとまごをしなくてはならないような席でもなし、集まつた客の中には、外に知人もなかつたのを幸さいわいに、僕は黙つて起つて、舟から出るとき取り換えられた、齒の斜へに耗へらされた古下駄を穿いて、ぶらりと

この怪物屋敷ばけものを出た。少し目の慣れるまで、歩き艱なやんだ夕闇ゆうやみの田圃道いんぼには、道端みちばたの草の蔭かげで蟬こおろぎが微かすかに鳴き出していた。

\*

\*

\*

二三日立ってから薮君やぶくんに逢ったので、「あれからどうしました」と僕が聞いたら、薮君やぶくんがこう云った。「あなたのお帰りになったのは、丁度好い引上時ひきあげときでしたよ。暫はなしく談はなしを聞いているうちに、飾磨屋かざりまさんがいなくなつた



ので聞いて見ると、太郎を連れて二階へ上がって、蚊屋かやを吊つらせて寝たと云うじやありませんか。失礼な事をしても構わないと云うような人ではないのですが、無頓着むとんじやくなので、そんな事をもするのですね」と云った。

傍観者と云うものは、やはり多少人を馬鹿ばかにしているに極きまっていはしないかと僕は思った。



日本文学電子図書館

---

山椒大夫・高瀬舟

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

---



日本文学電子図書館